
委員長とその守護者!?

月遼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

委員長とその守護者！？

【著者名】

Nゾード

【作者名】

月遼

【あらすじ】

学校の生徒会長であり、委員長として役割を果たしている月遼神奈は実は、とある組織のスパイだった。しかも、他に一人。運動馬鹿の九条凌駕と天才だけど女嫌いの黒崎龍也。この三人の関係は幼馴染みで、一人は神奈のガーディアン　守護者。この三人を取り巻く事件や刺客。学園、恋愛、裏（？）が織り交ざった何だか凄い（色々な意味で）ストーリー！

Prologue 神奈 side (前書き)

初、投稿小説です。初めてなので、読みにくいかもしれません、が、評価等して頂きたいと思いますので何卒、宜しくお願いします。

Prologue 神奈 side

Prologue 神奈 side

夢が破れ去るのなら

…私はずっと…

貴方の心の傷となつて残りましょう…

授業の終わりを知らせる、チャイムが校舎内に響く。

授業中なのに、教室で騒いでいた生徒達は、そのチャイムが鳴つた瞬間、急いで自分の席に戻つていき帰りの用意をし始めて。

帰りの用意が終わつた生徒から、席を立ち自分の荷物を持つて教室から立ち去つて行く。

…帰りの用意だけは早いね。私は、生徒達が教室から居なくなるのを暢気に見送りながら、思った。

それから数分。

あつという間に、生徒達は教室から、校舎内から居なくなり静寂な時間が訪れる。

「…………そろそろ…仕事の時間」静かな教室に私の声が、響く。

私は、月遼 ツキジョウ 神奈 カナン

学校の秩序を守る、委員長 の名を利用してとある組織の動きを探つている…スパイです。

そして、後2人…。

廊下の方から、耳障りな足音が聞こえる。

その足音は次第に大きくなつていき……私の居る教室のドアの前で止まる。そして、閉まつていたドアはガラツ、と音をたて開いた。

「神奈ツ、今日もやるぜー！」

飛び込んで来たのは、元気な男の声。その男の後に残りの1人も教

室に足を踏み入れる。

元氣に飛び込んできた奴は

九条

凌駕

運動馬鹿で落ち着きがない。

そして残りの1人は、

黒崎

龍也

暢気なマイペース野郎。

二人とも私の幼馴染みで……

私の守護者。

産まれた時から決まつていた事。運命としか言いようのない……

腐れ縁。

「…………はいはい……」

私は制服のポケットから鍵を出し、自分の荷物をまとめ教室を後にした。

長い廊下をこつこつと歩きながら向かったのは、職員室。
もう既に、教師達は校舎内には居なく、この時間帯になると鍵が閉まっている。

私は先程ポケットから取り出した鍵を職員室の扉の端にある鍵穴に差し込み回した。カチヤツ、と音が鳴り職員室の鍵が開いた事を確認すると私は鍵穴に差していた鍵を抜いて扉に手を掛けた。

ガラツ：

相変わらず職員室は珈琲の匂いが充満していた。

まあ、私には関係のない事だけど……。

職員室の奥へと足を進め、私達は資料が沢山置いてある地下室へと行く。

「…………神奈」

さつきからずっと黙っていた龍也が口を開いた。

「…………奥に誰か居る」

「…………？」

そりこえは、何かの気配がする。
た……でも、一体……？

……こんな所に私達以外が入る事は不可能よ、オートロック式のドアだし、パスワードは私達しか知らないもの……
侵入出来る訳ないわ……。

「…………」

一先ず、私達は気配のする奥の方へと足を進めていった。

暫く歩き続けると、特別な造りの扉が視界に現れる。
これが地下室の扉。

私は息を飲んでその扉を蹴り開けた。

通常ならば、鍵が閉めてあり蹴り開ける事は不可能なのだが……。
案の定、その扉は簡単に開いた。

「…………ふうん……奴等も、こちらにスペイを送ったのかしらね」「…………まさか？」

凌駕が冷や汗を流し神奈を見る。神奈は口元を歪ませ“宣戦布告か”とでも言うように鼻で笑つた。「…………あちらの方も本気を出して來たみたいね。スペイをこの学園に生徒として転校……いいえ、転校と言う名での潜入をさせ……こちらの動きを探るとか……そういうのでしようね」

これで私達も本気でやるしか無くなつたわね。まあ、良いじゃない。
……売られた喧嘩は買ってあげるのが礼儀と言つものよ。
…………楽しくなつて来たわ。

〔訂〕第一話【噂の転校生】（前書き）

前回の第一話の方とストーリーはあまり変わっておりませんが、色々と本文が変な所があつて修正しておりましたが……そのお陰で、文章は大きく変わり、文字数は大幅にUP。予定ではあまり変わらない筈でしたが……凄い文章の変わり果て様。しかしストーリーは変わらずの状態で、お送りします。今回は誠にやじしくしてしまい、すみませんでした。では、訂正版どうぞ。

〔訂〕第一話【噂の転校生】

第一話【噂の転校生】

神奈 side

あれから数日が経つた。

スパイは転校生である可能性が高い。と言うか、確実に転校生がスパイだ。

だから、誰がスパイだかは見当が着いた。

この前、転校して来た奴。

双子でイケメン、シンメトリーとか何とかで、生徒達の注目の的となっている。勿論、多くは女子の支持が高い。

私が、思うにこいつ等がスパイだらう。

少なからず、このタイミングで来たのなら暫定的にそうなる。
確定的な証拠はまだ、見つけてはいなければ、何れ、尻尾を出す
でしょうしね。

キーンコーンカーンコーン…

午前中の授業が終わり全員、昼ご飯を片手に色々な所へ散らばった。

今日の午後の授業は確か…HRホールルームの時間…。

さぼつても問題ないわね。私はニコッ、と微笑み自分の荷物
を手に、教室を後にした。

私が向かつたのは、意外と人のいない屋上。

たまに、不良が居るけれど別に、気にしないわ。
絡んで来たら、蹴散らすし。

さて、今日は誰が居るかしら? そう思い、屋上の扉を開けた。
誰もいないわね。

私は誰も居ない事を確認して、屋上の鍵をマスターキーで閉めて、

壁にもたれ掛かつ。

今判つてゐる情報は……名前、スパイとしての資質と実力、この学校に来るまでの経歴、家系……そこら辺かしい。

名前は兄方が夜寄格。

そして弟方が夜寄樋といふ名らしい。

スパイとしての資質は、まあまあと言つ所かしら。実力もまあまあ。何故つて、今まで夜寄なんて言つ家名は聞いた事がないから。

ある程度のスパイなら、全て月遼カンパニー情報部の方が、調べてる。だから、家名がその調べた情報に無かつたら、よっぽどの実力か新米野郎つて事。

まあ、スパイなら潜入する場合、苗字を変えて潜入するのが、当たり前なんだけど。

だから、実力と資質は微妙。

確定するにはまだ早いわ。

そして、この学校に来るまでの経歴。これもまた、確定的な情報じゃない。女子の話を盗み聞きして知つた情報。その女子の話によると……

『夜寄樋さんと柊さんは、お金持ちでこちらの方に、別荘があるらしいわ。だからこちらの方に来たのよ……』

だから、スパイとして來たんでしょうが。この女子はどうしたらこんな事思い付くのだろうか……。

この情報は紛れも無い、『デマ……嘘情報だ。

家系については、これも嘘だつ。あの女子の言葉だから。

……こういう事だ。

『あのお二方は、お母様がいらっしゃらないらしいわよ。だからあそこまで、お優しい人に育つたんだわ……。しかも、御先祖様は、浦島太郎とからしいわよ！－流石、素晴らしいですわ！－』

普通にスパイなら、家系の事は嘘つくわよ。つか、これどう考えたって、デマでしょうが。

そもそも、お伽話の浦島太郎が御先祖様なんて確実的に怪しいでしょうが。

情報らしい情報はここまで。後者一一つは明らかにデマ情報。前者は確定的じゃないけど、後者よりは増しな情報ね。さて、情報整理は一段落。

涼し気な風に撫でられ、うつとりして……ゆっくり瞳を閉じた。

深い眠りに着いた頃。

誰かの足音で、私の意識は覚醒した。

誰？

鍵閉めていた筈。

鍵を開けたと言つ事は……敵さんの登場ね。だって、先生とかじゃないもの。足音が。しかも、二人。

私は立ち上がり、腰の隠し銃に手を掛けた。その瞬間、後ろから羽交い締めにされ……。

「…………！」

何……一瞬、気配が消えた……！？

実力も資質もあるじゃない。

「…………何、危険性の高い物を委員長が持つてゐるのかなあ？」

後ろで、私を羽交い締めにしている少年が、息を殺し笑つた。そして、私の手中の銃を叩き落とした。

「…………ちつ……」

キン、と銃は金属音を出して地へと落ちた。まだ、もう一人居るのに……。久しぶりに失敗した。

「…………何か用？」

私は自分のへまに呆れながら、尋ねる。

当然、敵はこちらの動き、月遼カンパニーの動きについて、探つて
いるのだろうけど。

すると、もう一人の少年が私の目の前に現れた。

滔々、二人揃つたわね。

どうする…敵は男二人。

銃が無い今、女一人で対抗するのは明らかに無謀。

それに、きっと今はHRホームルームの時間だから、誰も来ない。
あの二人に甘えていた私が、いけないんだけどね。
だから、一人でこの事態はどうにかするしかない。

私は敵 恐らく私を羽交い締めにしている方が柊だろう
に気付かれないと、ナイフを取り出し一瞬の間に、柊の首筋にそ
のナイフを当てた。

「…………全く……、油断も隙も無いね。委員長は」

柊はやれやれ、と言つた風に苦笑する。

あんた等が油断したんでしょうが。

心中でそう呟き、私は賭けに出る。

「放して。じゃなきゃ、あんたの首が飛ぶけど」

これは、脅しや脅迫なんかじゃない。……放さなかつたら、本気
で私は殺す。

あくまで私は、敵に情けなんて掛けるつもりは無い。

そうじやなきや、自分が死ぬ事になる。私は何があつたとしても、
死ぬ事は出来ない。

「予告発言どいつも。でも、俺等も仕事つてのがあるからさあ、出来
ないんだ……よつ」

私の少し前に居た榎は、一気に私との間合いを縮めた。

距離が近距離だった為、避けるには、時間が足りなくて。

私は最終手段として、柊の首筋に添えたナイフを横に流した。
しかし…変だつた。

普通なら、血が吹き出す筈なのに……ナイフには血も付着してい

なく、呻き声も聞こえなかつた。そして榎は、呆気に取られて呆然としている私の溝を殴り……私の意識は途切れた。

〔訂〕第一話【暁の転校生】（後書き）

非常に文章が変わっていますが、第一話は元第一話後編の話と同じような感じになりますのでご安心を。

第一話【突然の……】（前書き）

似たような感じに仕上げました。…多分。まあ、読んで頂ければ判ると思います……。軽く危ないシーンがあります。

第一話【突然の……】

第一話【突然の……】

龍也 side

キーンコーンカーンコーン……授業の終わりのチャイムは、何処でも有りがちなこの音。今は五時間目の授業が終わるチャイムだ。

生徒達は、授業が終わったとばかりに、席を立ち上がり次の授業の用意もせずに、何處かに出歩きに行く。

非常識。だけど、此処に潜入してからは見慣れた光景だ。こういう学校なのだから仕方ない。

一先ず俺は、次の時間の用意…… と言つても、道徳だから筆記用具を机に並べるだけだが それを用意して、教室を後にした。

さて、廊下に出ると毎回毎回……怪奇現象?が起こる。周りでは、女子共のきやーきやーと言つ黄色い声。

凌駕にこれを相談すると、

『お前、モテるからだろ』

と言われる。

……正直、五月蠅くて嫌だ。

俺はその場から直ぐに逃げて、凌駕のクラスへと急いだ。

「…………凌駕っ」

「…………ん? あ、龍也か」

「…………ん? あ、龍也か……じゃないだろ。来たのに始めの言葉がそれか。

全く…………15歳にもなつても変わらないんだな……こいつは。

まあ、いいけど。

「…………神奈は？」

凌駕と神奈は同じクラスだ。

でも、今見渡した所……神奈の姿は見えない。俺がそれを尋ねると、凌駕は苦い顔をして溜息をつく。

何だ、その意味深そうな溜息は……。

そんな事を思いながら、凌駕の返答を待つ。

数秒。

凌駕の口からとんでもない言葉が発せられた。その言葉を聞いた俺は、啞然として立っていた。

昼休みから行方不明？

「…………」

黙り込む凌駕。

俺は目眩がして即座に倒れそうだった。

お転婆姫から目を放すと……必ず変な事が起きる。

しかも、だ。守護者は姫からは決して放れてはいけない筈なのに……。

「…………凌駕」

「…………はい」

俺はこりと笑顔で微笑み凌駕を呼ぶ。

返ってきたのは力ない声のみ。

「…………全く……」

それにも……ヤバイな……。

俺は偶然にも、あの二人……夜寄兄弟とクラスが同じだ。

あいつ等も神奈と同じく、昼休み頃から居ない状態で、それを神奈に知らせようとして、此処に来たんだけど……。

神奈が今居ない状態プラス夜寄兄弟も居ないと言う事を踏まえ、考えると……出くわしてる可能性が高い。

「神奈を探しに行く」

「…………え？」

返つて来た声は、呆氣ない声。

恐らく、神奈から目を放した事を怒られるとでも思つたのだろう。怒りたいのは山々だが、主が今、危険な状態かもしれない今、そんな余裕は無い。

「……今、ヤバイ状態なんだよ」 「…何となく、わかつた」
一先ず、俺等は神奈を探しに教室を飛び出した。

神奈 side

夢の中。不思議な感覚は、ずっと前にも感じた事のある感覚。うつとりとした甘いような感覚、……と言つた方が、正しいのかどうかは判らないが。

と、そこに誰かの声。

(……さて……うする?……)

その声が頭の中に響く。

その瞬間、ぞつ、とした感覚に襲われ、私の意識は覚醒した。

「…………！」

「やあ、お嬢さん。お目覚めかな？」

目の前には、あの一人が座つて居た。

直ぐに私は今、置かれている状況を理解した。

私は抵抗手段の武器を取られ、おまけに柱に縛り付けられている状態だった。

所謂、籠の鳥だ。

「…………何するつもり？」

私は怪訝そうな目で、一人を見た。

すると、終は私の頸を掴みくいつ、と上げた。

「はい？」

「何だか…危険なよつな……。

「…………」こういう事、「

柊はにつこり微笑むと、その微笑みとは裏腹に、荒々しい口付けで私の唇を塞いだ。

「…………ん、…………んツ…………？」

混乱する私は、先程とは違い状況を理解する事が出来なかつた。その前に思考が働かない。

唯、直ぐに理解出来た事は…………このままじゃ、犯されるツ！！抵抗しようとも、縛られていて上手く身動きが取れなくて。深くなつていく口付けに、抵抗する事も出来ず、涙だけが溢れていく。

思考がついていけない私なんて、気にせず、柊は私の服に手を伸ばした。

「…………ちょツ…………やめツ…………」

私は拒否の声を出すが、聞いてくれる筈も無く。

少し離れた唇をまた、強引に押し付けて、制服のリボンを外し。第一、第二ボタンも外していく。私はもう、まともに喋る事は出来ない状態になつていた。

もう、怯えて涙を流す事しか出来なかくて。

とその時。

誰かの声が、私の脳内に響く。

「…………退け。さもないと撃つ」その声と同時に、柊は私の唇を解放して、楓と一緒に後ろに跳んだ。その声の主は、素早く私を守るように私の前に立つ。

龍也だ……

「…………遅くなつてゴメン」

龍也は私にすまなそうに謝る。

寧ろ、来てくれてありがとう……でも、私にはそれを言ひ気力はなく。私は横に少し首を振つた。

調度その瞬間、もう一人が出て来て、柊に飛び膝蹴りをかまして、派手に登場した。

「到着ツ
」

凌駕…。

二人が揃ったのを見た、柊と榎は苦笑いして意味深そうな言葉を残して、その場から姿を消した。

“まあ、一人揃った事だし御挨拶はここまでかな。続きを楽しみにしてるよ…じや。”

意味深な言葉はずつと私の頭の中で回っていた。

龍也は柱に縛り付けられている私を開放しようと、私を拘束していた紐を解いた。

一気に体の力が抜けた私は、龍也にもたれ掛かる状態になつて。龍也は少し驚いたような顔をしたけど、優しく微笑んで私の頭を撫でた。

その瞬間、また涙が込み上がつて。

「……うツ……怖かった、怖かったよお……ツ……」

泣き出す私を、龍也と凌駕は優しく宥めてくれた。

第一話【突然の……】（後書き）

御意見、感想等あれば宜しくお願ひします。

第三話【語り月】

第二話【語り月】

凌駕 side

今日は何だかいたたまれない一日だった。

神奈は普段、滅多にあらわにしない感情を剥き出して、ずっと泣きじゃくついていた。

俺等は、そんな神奈を優しく宥めていた訳だけど……。

その後、神奈は泣き疲れたのか、龍也にしがみ付いたまま、寝てしまっていた。

まだ、帰る時間では無かったが……仕方無いから、帰つて来たんだけど……。

次いでに言えば、元々、俺等には家は無い。

月遼神奈に拾われた犬なんだ。

だから、どちらにせよ帰る場所は同じで。

一先ず、俺等は龍也の部屋に集まつた。

寝てる神奈を一先ずベッドに寝かせて、俺等はそのベッドの横に座る。

その瞬間、何処と無い安心感が俺の心を満たした。

それは龍也も同じだと思える。

「…………なあ…………」

幾分の沈黙を破るように龍也が重そうな口を開いた。
俺は、龍也の方を向いて話を聞こうと、身を乗り出しつ。

龍也は深く溜息を吐いて、溜息と共に吐き出すように言った。

が、龍也の口から発せられたその言葉は予想外のものだった。

「……あの一人、殴つていい?」「…は?」

普段、天然ボケ系な龍也は殴るとか暴力とかそういう方向の奴では無い。

だから俺は啞然と龍也を見ていた。

龍也はその視線に気付くと深く溜息を吐き俺を忽然と見つめていた。
その瞳は普段の龍也からは感じられない程の殺意が籠った瞳でいて。

正直、一瞬垣間見た龍也は龍也では無い……他の奴かと思った。

「……あいつを泣かしたんだ」「……」

そうだ。

あの一人はあいつを泣かしたんだ。龍也が怒るのは当然。だけど……

龍也のその怒りはきっと……

こいつがあいつの事を好きだからじゃないのか?
でも、こいつは多分自分の気持ちに気付いては無い。
何故なら、こいつも俺も……同じだからだ。

確定的じゃないけど、何と無く……判る気がする。
俺はあいつが好き、なのかも知れない事。

いつか確定的な事が判る時が来るだろ?けど。

「……なあ、一つ聞いていいか?」

「……何?」

龍也は突然質問をして来た俺を、訝し気な目で見た。
いぶかしげ

答えは返って来ないと思つけど……こいつの気持ちを知りたい。

俺はそう思いながら尋ねた。

「……神奈の事、どう思つてる?」

龍也 side

「…………神奈の事、どう思つてる?」

凌駕の真剣な声が室内に響く。

正直、わからない。

俺は神奈の事をどう思つてる?

……。

今はわからない。

そんな事、考えもしなかった。

「…………わからない」

「…………やつぱりな。でも、俺等のお姫様を守りたいんだろ?」

「…………」口、と微笑んで凌駕が続ける。

「守護者としてじゃなく……一人の男として。せっきの尋常じやない怒りはこの感情から出たやつだと思う」

「一人の男として……あいつを守りたい……?」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

隣で寝ていた神奈が起きた。

「…………んう…………?」

目を擦り俺等をじっと見詰めてぼけー、と口を少しだけ開けて。

「…………神奈、大丈夫?」

俺は彼女の髪を撫でる。

「…………大丈夫……」

そつ言つた神奈の顔はとても不満そうな顔をして。

……それは当然だな。

あんな事、神奈にとつては初めてで。神奈が泣く事なんて、滅多に無いし。

……それ程、だつたんだよな。「…………もう…、ヤダあ…」

それにまた泣き出して…。

「…………大丈夫だから。ね？」

神奈の髪を梳くように撫でてやる。

さらさらな神奈の髪はするつ、と俺の指を通り。瞬く間に神奈は安心して寝て。

…………外は既に夜を過ぎて、深夜とも言える時間帯になつていた。

神奈は先程寝たままの状態。

「…………356…3、57ツ…」

その隣静かに神奈を起こさないよう凌駕はスクワットを幾度も繰り返してやつている。

どうせなら外でやればいいのに。…………そういえば凌駕は組織内でも運動神経だけはずば抜けていて、組織内の女からは異様に人気が高い。

…………全員が凌駕の所に行けば楽なんだけど。

何故だかは知らないけど、組織は俺派と凌駕派で別れている。

……いや、学校でも、か。

だから、女は嫌いだ。

きゃーきゃー、奇声上げるし。

……でも、神奈は別。

神奈は何故か嫌いではない。

寧ろ……嫌いの逆。

奇声上げないからか？

いや、違うな。

幼い頃からの仲でもあり、神奈だけは心の底から許せる。それに、守りたい。

内心、理由は分かつてゐる。

でも、きっとその気持ちには気付いてはいけない。気付いた時、傷つくのは自分自身…………。

「…………なあ、龍也……」

「…………何？」

スクワットの休憩か、凌駕はスクワットを止めて俺に話掛けて來た。

「…………本当、久しぶりの泣き顔だよな…………」

「…………そう言えれば、前はよく泣いたりして甘えん坊だった。いつ頃だろうか、突然神奈が泣かなくなつたのは…………」

「そうだ『あの時』から……」

景色は白銀の抱擁ホウヨウを受け、白い雪が舞つ頃…………。

俺等が組織に、神奈に拾われて数年。

俺達はまだ、正式な社員とは認められていない9歳頃の冬。

「…………寒いよ…………」

長い漆黒の髪を揺らして歩く一人の少女。

「…………寒いに決まってるだろ?ほり、これでも羽織れ」

こんな寒い中、半袖の服を来ている少年は少女に温かい防寒着を着させる。

少年は少女より断然、背が高く、ぱっと見15、6と書つた所だろうか。「…………ありがと、郁斗お兄ちゃんつ」

少女は満面の笑みを郁斗という少年に見せる。

「…………少女の名は月遼神奈。」

そしてこの少年は月遼郁斗。

神奈には優しいお兄さんがいた。

でも、過去形だ。

郁斗さんは、当時…月遼カンパニーの正当後継者だった。

が、その為に奴等に命を奪われてしまった。

郁斗さんの死を報された神奈は、当分部屋に籠りっきりの状態で、部屋から出て来たころには、心だけ違う世界に行ってしまったようだった。その時、部屋に閉じこもり一人、声を殺して泣いていたのは俺だけが知っている。

「…………まあ、そういう事」

「…………やつぱり…」

大低、この時くらいだと言つるのは理解出来るだらう。

「…………俺は郁斗さんの代わりじゃなく……一人の男としてここにこれを守る」

ぼそつ、と自分の口から出た言葉に耳が熱くなる。

「…………良いんじやん。あ、後忠告。龍也は神奈の事を守りたいんだろ? 一人の男として」

凌駕は一旦、言葉を切り俺を見た。そして続けた。

「…………俺も一人の男として守るからな」

「…………凌駕、」

その言葉が意味している事は理解出来た。

「…………多分、俺等は同じなんだよ。まあ、神奈を譲る気は無いけど」

凌駕は微笑しながら宣戦布告。

「…………凌駕は神奈が好き。」

「…………俺は……。」

きつと、好きなんだ。

いや、きつとじやない……。

俺は神奈が好き。

認めてしまったからには、もう後戻りは出来ない。

「…………まあ、俺も譲る気はないから」

「おう！」

凌駕は元気よく、俺の言葉に応じた。

親友との戦い。
⋮

親友だけど神奈を譲るのは出来ない。

でも、今まで良いと思う自分が心の奥底に居た。

でも、俺は神奈が好きなんだ。

その気持ちに嘘は無かった。

第四話【戦慄！？】

第四話【戦慄！？】

神奈 Side

朝日が上り、小鳥の声が響き渡る。そんな少し早めな朝、私は田を覚ました。

眠っている。

卷之三

脳内モニターで昨日の事が映し出される。

しがも

そして、

私のリミッターが崩れた。

思ひ、されば、一人は出来てしむるが

あーッ もうッ ！ ！

何で泣いたのよ！！

ツ

.....

有シ只さん之事……

泣く時、泣きやうになる時、

いつも、思い出すのは……郁斗児さんの事。

だから

泣きたく無かつた。

でも……、涙腺がぶち壊された。

ヤダッ……思い出したくない……嫌だよ……、嫌だよ……。

「…………神奈？」

「…………」

調度起きた龍也は泣きそつた私に声を掛ける。
龍也あ…………。

やばい……、何だか泣きそうになつて来た……。

ぽたつ……、ぽたつ……、

もう既に涙ぐみ……。

私は泣き顔を見られないよう、龍也に背を向けた。

「…………神奈」

龍也はそんな私を何の突拍子も無く、そつと抱きしめて。

兄さんの面影と重なる龍也。

ううん、兄さんは死んだんだから。

重ねたら駄目。

でも、龍也に抱きしめられると、兄さんに抱きしめられた感覚に陥る。

…………正しく言えば、兄さんに抱きしめられたような安心感を得られる。

何で？

本当に不思議。

「…………ふえッ…………ぐずッ……」

「大丈夫だから。安心して？」

優しく繰り返される龍也の言葉。次第に落ち着く呼吸。

それと共に、今度は違う不安が私の心に満ちていく。

いつかは、龍也と凌駕から離れなければいけない。

自立して月遼カンパニーのボスになる時が来る。
出来れば、ボスになつた後も従者で居てほしい。
ずっと傍に…傍らに居て欲しい。

でも近い将来、それは現実となるんでしょうね。

彼等の仕事は、次期ボスとなる私の護衛者、守護者であり…
契約期間は、私が18歳になるまで。

だから、私が18になつたその時…。嫌だよ。そんなの…。

…でも、仕方無いよね。

…だつて、彼等だつて一人の男性なんだし…。

何れ、結婚して一つの家庭を作り、子供も作り…。

若しくは、今、彼等には想い人がいたりするかも知れない。

私は、彼等が恋をするのに邪魔な存在なのかな？

「…うう…ねえ、龍也…私つて邪魔でしょ…？」

龍也 side

「…うう…ねえ、龍也…私つて邪魔でしょ…？」

泣き止んだと思った矢先、又泣き出す神奈。

…邪魔？

何で…？

俺は訳が判らなくてどうすれば良いのか判らなくなつた。

「ねえ、どうしたの？」

一先ず、聞いてみる。

すると、神奈は泣きながら言つた。

「…だつて…ひつくなつた私のせいで…ぐずつ…大変な日

に合つたり、するし……好きな人がいたと、したら……私は邪魔、
ひつゝ……でしょお……」

えーと…。

その好きな人つてのは神奈なんだけど……。
それに、俺は神奈の為ならどうなつても良い。

俺は神奈の肩をもう一度優しく抱いた。

「 邪魔なんかじゃない……」「…………ううっ…………でも…、好き
な人とか……、居るんじやないの…………いや…、居るでしょ?
なら、邪魔じやん……ツ」

小さく搾り出すような声は、凄く悲しげでいて。

不安げな神奈の声は、静寂な部屋に響いて余計に虚しさを感じられ
る。

「 ……邪魔じやない。だつて、俺は…………」「
口が滑りかけたその時、タイミング悪く、凌駕が目を覚ました。
いや、これはタイミングが良かつたのかもしれない。
もし、このまま凌駕が起きなかつたとしたら絶対に自分の想いを神
奈に知られる羽目になるから。

神奈はいきなり目を覚ました凌駕により、自我を取り戻して。
頬に乾いていない涙の後があつたけれど、その目はいつもの神奈に
戻つていた。

それは俺しか知らない涙。

「 ……おはよう……」

急そうに朝の挨拶をする凌駕。

俺等も「…おはよ…」と怠いそうに返した。

それから朝飯を済ませたりして。

朝から相変わらずハイテンションの凌駕は通学中、月遼家特製のリ
ムジンに乗りながら、鼻歌を歌つていた。

神奈は少し五月蠅ううにしていたけど少し笑つていた。

で、学校。

キーン、コーン、カーン、コーン……

俺等はギリギリ……

「黒崎、遅刻」

担任の先生に言われて……見事に遅刻。
そして神奈と凌駕も

“すみません”

と今頃、先生に頭を下げている所だろう。

俺も小さく“すみません”と言つて、自分の席に行つた。
学校の鞄から今日の授業の用意物を取り出して、鞄をロッカーにしまつ。

ちなみに奴等……今、俺が一番ぶん殴りたい奴……夜寄兄弟は
兄弟仲良く、席が隣同士で俺の前。目の前だ。
黒板見ようとするべく視界に入る。
……。

俺の殺したい欲望が……。

どうも抑え切る事が出来ない。

俺らしくないな。

と俺は鼻で笑つた。

まあ、そりやそうだ。

俺等の姫を汚されたのだから。

ヤバイ、

今、制服の裏ポケットには拳銃が……。

まあ、事件だけは起こさないようになければ。せめて、人前ではよそう。

そつと、心の中で決心?した俺だった。

第五話【俺等の姫様?】

第五話【俺等の姫様?】

神奈 s.i.d.e

ああ、今田は何て最悪な田なのだろうか……。

生徒会長であり委員長でもある私が遅刻するなんて
前代未聞の失態……。

はあ

……

誰にも聞こえる事の無い深い溜息を心の中で漏らす。

まあ、本業スパイなんだけど……

自分に課せられた仕事を遂行する事はとても大切だから……
この失態に関しては…後で自分にお仕置きをするしか無い。

ちなみに、今の時間は11時59分。

所謂、4時間目。
体育の時間。

男子VS女子…バスケットボールの試合中…。

「……委員長、バス！…！」

チームの井上さんが、私にバスを回す。

「…了解…」

飛んできたボールをキャッチして相手チームのゴールへとドリブルをしながら走る。

「 わうははせねえーー！」

ゴールに近付いた所で、相手チームの主将 凌駕が私に飛び掛かつてくる。

「邪魔」

私は走るスピードを上げて、凌駕を振り払った。
そして……

ダンクショートを入れた。

ダンシ、

「…………委員長はやっぱり凄いね～」

いつもよりも私の席に集まつて来る生徒達。

そんな事は無いよ。
と、言つて愛想笑い。

「これくらい出来なかつたら、スパイやつてらんないし。」

そこに凌駕も来る。

「 神奈強過ぎだつて~」

お前は言わんでも宜しい!~。

「凌駕もね。

じゃあ、そろそろ行く?..」

「 ...あ、うん」

「じゅ」

私はクラスな人達小さく
“行つてきます”
と言つて教室を後にした。

廊下に出て向かつたのは勿論、龍也の教室。

「失礼します」

「君、授業中だ あ、月遼君か。何か、用かな?」

まだ授業の終わっていない教室に入った生徒を叱りついた教師は
私の顔を見て態度を変えた。

「もひ、授業は終わりです。
長引かせるつもりですか?」

私はあくまでも笑顔で言った。
教師はそんな私に怯えながら

「…………すみません……、
じゃあこれで授業を終わりにする……」

と囁いて、逃げるよつて教室を出て行った。

途端、生徒達は喜びの声を上げる。
あの教師は、何故か授業範囲が終わっているにも関わらず、授業
を長引かせようとする……。

一応、私は生徒会長だから…………それを中断させるのも仕事なのよ
ね――。

まあ、この教室に来たのは違う田的だけど……

「…………龍也、ちゅうと

龍也の席に行く。

「…………少し夜寄兄弟と田が合つた……

「…………龍也君なら寝てるよ

柊が私に忠告する。

本当だ……。

「…………その通りですね（棒読み）

……馴れ馴れしい……

全く……

相手するのも嫌だし

「……龍也、起きなさい……」

早くこの教室を出たい。

その一心で龍也を起しつゝと龍也の体を揺さぶる。

「…………ん、神奈…………？」

凌駕 side

龍也の教室に入るとやつぱり視線があいつ等に行く。

しかも神奈に馴れ馴れしく話掛けている。

そして明らかに神奈の顔が笑っていない。

「…………ほり、龍也……起きたならひとつとこ来なさい」

神奈が早くこの教室を出たそつて言つ。まあ、それはそつだ。

「…………龍也、ほり…………」

龍也の耳元で俺が何かを囁くと、龍也は直ぐに身体を起した。

……早ツ……（笑）

ちなみニ……何て言つたのかつて……

神奈に嫌な思ひをさせるのか？

つて事。

「…………つと。じゃあ行く」

屋上。

今回ま沢山……不良共が居た。
しかし神奈はお構い無しに屋上に上がる。

度胸あるな……

まあ、ボスの娘さんだからな。

唯の不良なんかには負ける筈は無い。

ほら、また不良さんが寄つて來た……

「…………おい、お嬢ちゃん。此処は俺等の敷地だぜえ？
わかつたならとつとと行けよ！－？」

「…………はあ……五月蠅いみ？

そつひこせ退いたら？」

神奈が突つ掛かつて来た不良を睨む。殺氣籠るその顔、表情はまだ神奈の本気の殺氣では無い。

で、そのまだまだ本気じゃない殺氣に身をぶるッと震わせる不良。
…………情けねえ…………

でも馬鹿な不良はもう一度突つ掛かつていく。

「…………調子のんじやねえ……」

今度は殴り掛かる。

「…………馬鹿なの？」

神奈はそう言って不良の拳を片手で受け止める。そして、もう片方の手で不良の腹を殴つた。

勿論、不良は氣を失い地に身体を落とした。

で、残りの不良等も神奈に殴り掛かる。

何人居たって雑魚は雑魚だ、とでも言いたげに不良等を軽く遇つ。

…………Timeは0・6秒。

早ツ――――

「…………あ～弱い。つまらない。でも、奴は嫌」

…………あ～……

奴＝（イゴー）夜寄兄弟か。

まあ、そうだな。

あいつ等は一応、雑魚のレベルじゃない。

……が、しかし……

神奈にとつては

最悪。

顔なんて見たくない。

消えちまえ。

的な奴だからな……

俺もあいつ等とはなるべく接触を避けたい。

あいつ等見るとなんかむかついてくるんだよな……あの、笑い方とかなんかいけ好かねえ……

まあ、これは俺等三人同じ事考えてるようだけどな……。

あ、そりゃあ……

「…………、今更だけじゃあ…………」こいつ等の処分ビアフル。

こいつ等って言ひのは勿論、神奈にボコボコにされた情けない不良共の事……。

俺がそつぱつと、神奈は「口」と微笑んで呟いた。

「……放つておく事は無い。
唯、実験させてもらいますよ？」

丁寧な言葉でやうじと問題発言……。

俺等の姫様は
やつぱり凄かった。

第五話【俺等の姫様?】（後書き）

とくに何もありませんが…………もつすぐ年が终わります。新しい年が来ても宜しくお愿いしますね。

第六話【知らない事もある?】

神奈 side

ふう

屋上へ上がれば生意氣な三年共。

ま、三年の不良だからと書いて手加減なんて無いけど…………（相手の年齢なんて関係無し）。

「…………では……重大な事を話す。今朝、お父様から通知がありました。これから私たちの行動について」

いつもこんな重大な事を話す時はこんな口調になってしまつ。

まあ…………そういう風に仕付けられたんだけどね。

えっと…………確か……

「…………行動は…………奴等がこちらに奇襲を仕掛けて来た場合…………殺さないまでにやる。

そして

「

これが…………最も一番凄い内容…………

「……仲間の一人が傷、若しくは致命傷を負つてしまつた場合……奴等の命の有無は厭^{いと}わない。しかし……もしそうなれば……死体は本部に持ち帰る事……」

……隨分と凄い内容。

こんな事を言われるのは初めてだつた。

……それ程、奴等は危険視されてるんだらうけど。

重い空気が屋上全体に広がる。

凌駕も、龍也も同じ事を思つてゐるに違ひない。

「…………と言つ事……。

結構……難易度は高いみたい」

「そうだな……隨分と……」

「……ヤバイらしいね」

「「「…………はあ…………」」

三人の溜息が静かなその場所に漏れ……

「…………まあ、次……奴等が行動を起こすのは……宿泊学習とかだらうから……固まつて動く事」

「どうじやないと……何が起きるかなんて……判り切つた事だし……

あ、でも待て。

そつこいつ事は……？

? 室 同 屋 部

ははは。

ちよつと困るなあ……。

そりゃ別に『そつこいつ事』とかの心配は無こよ? (やつや少しあるナビセ)

私が心配なのは…… 着替えとか…… 風呂とか……

……

うん。守護者への心配とかじやなく別の奴等に対しても心配ね。

奴等……人が着替えてる間とか風呂の間とかに……

奴等の方ね。龍也、凌駕とかの奴等じゃなく……変態の方。

「…………龍也、凌駕…頼んだよ。うん。…………奴等、ヤバイから。
しかも前回の言い残したあの…………発言」

「「勿論」」

二人は声を揃えて誓いを立てた。

…………

はあ
…………

大変
…………

う
…………

奴等め
…………

はあーあ
…………

なんか疲れるなあ

なんかさあ……私つて普通の女の子なのかなあと思つんだよねえ……
（勿論、普通じやないのは重々承知）

普通、か
…………

普通つて何だろ？
…………

その前に女の子つて何だろ？
…………

まず大前提として……私みたいな事はやらない事……。

それにオシャレとかするとか?

わからないんだよね……

ま、この仕事をやる事は私の……月遅家跡取りの義務だから。

それに……これが私なんだから。

この仕事があるから『私』が存在する意味持てるのだから。

だから私は今まで良い。

……
嘘。

実際は嫌。

守護者は私を守る存在。

そう決まってるけどさ……

その役柄のせいで沢山の人人が傷付いていく……

主の身替わりとして。

私はそれが嫌。

龍也と凌駕が近くに

傍に居てくれるのは

嬉しい、けど……

私の身替わりで傷付くなんて……

そんなの私は嫌。

それに主が守護者を守るのか
一番の形だと思う。

。 .

龍也と凌駕は知ってるのかな?

私の本音を。

龍也 side

さつきから浮かない顔をしている神奈。

溜息をついては……また空を仰ぐ。

ずっとその繰り返し。

…………正直、話し掛ける空気では無いのはわかつたけど。

でも話し掛けるしか無い状態になつた。

「神奈、もう時間」

「…………え？」

こちらを振り向いた神奈の肌が橙色になる。

時刻は既に夕方を過ぎた頃。

グラウンドからは放課後の部活に精を出してくる野球部の声。

「…………あ……ゴメン…………」

意識飛んじゃつてた」「…………」

そつとつて申し訳ない様に頭を下げる。

「ん。大丈夫…………じゃ、帰る?」「…………」

「…………う…………ん…………」

離れるのは危険だけど、宿泊のヤツって先生とかが決めるじゃん?
だから部屋は確実に離れる……だろ? それって結構危なくねえの?」

あ

「それなら、私……宿泊の実行委員長だから……ビビにかかる
から大丈夫だよ。奴等の動きも判りやすいような部屋配置にするし」

「…………あー、その手があつたか!..」

ビビにもとにかく委員長なんだな……神奈は……
でも……

「奴等がきちんと『学生』として動くの?」

「…………大丈夫だよ。

奴等には……沢山のストーカーがついてるから。

宿泊と言う大チャンス?
をそこら辺の女子が黙つてると思つ?

…………確実に奴等にたかる

「…………そういう事か…。

何か変な動きをすれば直ぐ近くに居た女子がそれを叩撃して……
そうなるから奴等は当分……
動けない……」

「……ま、奴等が何をするかなんて判らないから……

生徒の安全保証はしないけど」「

そういつた神奈の表情は黒い笑顔になつていて。（笑顔つてオイー…）

安全保証無いって……

大丈夫なのか……？…

「……………じうせ、これ……………親父の罷だらうし」

親父？

「……………検定つて所か？
跡取り試験つて事だろ？」

ま、待て！

口調が変わつて……

隣を見ると俺と同じく

神奈の変貌ぶりに口をあんぐりと開けて神奈を見る凌駕。

その視線に気付いた神奈。

「……………何？じうじしたの？」

するといつもの神奈に戻つた。

今さつきのは幻覚と幻聴か？

男一人は同じ事を心の奥底で呟いた。

『一体何なんだよ?』

まだまだ知らない事があるらしい

第七話【光と陰】

神奈 side

なんか私……変な事でもしたのかな?

あの帰り道からずつと様子がおかしいんだよね……
二人の。

それからアジト いや、自宅に帰宅して。

で、…………今カンパニーの会議室。

上の入間が集まって会議をしている。

「…………この行動は我等としても…………」

これは勿論 奴等の動きについての話。

情報部からの情報によると

奴等は裏の方で大きな動きを見せたとかどうとかだけれど……

正直…………私が何でこんなトコに居なきゃいけないのか不思議だつた。（そりや、私の立場がそんなんだけれど…………）

そんな事を思つていると

「…………ねえ、お兄さん達へ
こんなのは承知してゐから次いこー…………。そんな所話しても話が進
まないよ~」

ぱつと見、15歳にも満たない少年が幹部……むつきのながつたる
い話をしていた男、湯原さんに抗議した。

言つちや悪いが回惑だ。

Jのトは美月響くん（ミツキ ヒカル）。

見た目とは裏腹にこれでも幹部。

「…………美月…………貴様…………」

しかもで大人げ無く湯原さんがキレて…………

「…………何、オッサン。
文句あるの？」

響くんは湯原さんを挑発しまくる。

そして言い争い。

…………。

「…………少しは静かにしてください~」

「ハーゲ、爺が」

「何だと…？ ガキのくせに」

「…はあ！？」

……。

「…あの、静か「ガキが！」「ハーゲ！」

私の声が「こと」とく遮られる。

……

頭の中で何か弦が切れるような音がした。

「 黙れ」

口調が一瞬にして変わる。

響と湯原は凍つた様に固まる。

そう。

この二人はカンパニーの姫の逆鱗げきりんに触れた。

決して触れてはいけないのに…

私を怒らせれば何が起きるなんて言ひまでもない。

「…………貴様等、良い度胸をしているな?」

私の口調が、声音が低くなる。

私は不機嫌になると不思議な事に人格が変わる。

それはあの守護者も知らなかつた事。つか、知らない事。

「…………はあ…………ダリイなあ…………うつはあ…………」

この人格の私は完全に不良だ。

「…………で、湯原。

年上だろ? 大人げ無さすぎだ。少しは考えろ」

そして、この変化に本人、私は気付いてない。

つか今のこいつは私の人格だから。

今喋つているこいつ 神奈は神奈じやねえつて事なんだけどよ

…………

なんだかこいつの体に私の人格が投射されたみたいでさ…………

乗つ取つた訳じゃねーけどさ

こうなつた敬意はとにかく私は知らない。

唯、判る事は

こいつが半端無く不機嫌になると私の人格に変わつ一つ事だな
そして私の人格が表になつてゐる時の「こいつは、意識まる」と眠り
込んでる状態だから……さうを言つた通り……

こんな事が起きている事には気付く事は無い。

そしてこいつの不機嫌が直つて来ると、こいつの人格が表になる。

「…………あれ？」

「「本当ッ、すみませんー」」

気付けば田の前には私に謝り続ける。湯原さんと響くんがいた。

何があつたつけ？

確か湯原さんと響くんが喧嘩になつて……

私がそれを止めて……

あ、そうか。

この一人はそれを……

(勘違い)

「判つてくれれば良こよ。

じゃあ……会議を再開ね」

「「はーーー。」」

湯原さん、響くんを含む幹部達はペシッと背筋を伸ばし返事を返した。

軍隊みたい(笑)

心の中で詫びちや悪い事を呟いて会議を再開させた。

第八話【凌駕の想い】

凌駕 side

あの帰り道の事から数時間。

神奈はと言つと、会議室でなんか色々雑談している。

（雑談じゃねーよ、会議だ。 by 作者）

そして龍也は眞面目に学校の宿題に取り組んでいる。

龍也が取り組んでいる宿題を上から覗き込むと……

信じられない数式が書き綴られていた……

……

なんだこりゃ？

つか、こんなのやつてねえよ？

まだ習いもしてねえよ？

……あ……

そういうや

こいつ、学年トップの頭脳の持ち主だった。

運動神経だつて抜群だし

顔もいい。

本人は自覚無しだけどな。

つたぐ、だからお前はモテるんだよ。

まあ、俺だつて一応モテるんだぜ？

つーか、んなのどうでもいい。

そこいら辺の女にモテたつて俺にとつては何の意味も無い。

世の中はやっぱ難しい

別に欲しくもないものは簡単に手に入る。

逆に欲しいものはなかなか手に入らない。

仮に手に入ったとしても……

大きな犠牲が伴うんだよ……

そう、とても大きな犠牲

食つか、食われるか。

弱肉強食……。

今の状態はまさにそれなのかもしれない。

まあ、今の状態は

取るか、取られるか

みたいな感じだろうけど。

もし、神奈が龍也の所へ行つたら……

俺はどうなるんだろうな

きっと……悲しいけど……

神奈への思いを忘れる事が出来るんだろうか?

もし、神奈が俺の所に来たら……

龍也はどうなるのだろうか？

……なあ、郁斗さん

俺は神奈が欲しい。

でも親友を失うなんて嫌なんだ

ずっとこの三人の形で居たいんだ

なあ、俺はどうすれば

この恋は片方が諦めなければ
実らないんだ

でも

俺はきっと諦める事なんて出来ない。

そんなに軽い気持ちじゃない

それはきっと龍也も同じだるうにビ

……運命は何で

こんなに残酷なんだろうか？

どうして俺達三人が仲間なのだろうか？

俺達が敵とかだったら……

こんなに恋が辛いだなんて事

知らずにいられたのに……

どうして……

出会ってしまったんだ？

どちらかが犠牲になるしかない

なんて……

残酷だ。

でも、もっと残酷な事は……

神奈は郁斗さんが好きって事だ。

だから最初から知っていた。

片方が犠牲になる必要性なんて

神奈がこちらに好意を寄せていないのだから

片方が犠牲になるつてのは……

もしもの話だ……

でも、本当に残酷だよな……

郁斗さんが逝ったなんて……

郁斗さんが逝つて無かつたら……

神奈は悲しい想いをする事も無いのに……

どうして貴方は逝つてしまつたんですか

貴方が生きていれば

この恋は楽だった筈なのに

神奈も幸せだった

俺達だつて貴方なら諦める事が出来た。

生きてれば……。

違う、

生きてても……

きっと諦められなかつた

今さつきのは

“もしも”と言つ考へで逃げたかつただけだ。

はあ……

絶対に諦められないってわかつてゐるから悲しいな

まあ、それは三人共同じだらう……

神奈だつて必死に郁斗さんの事を忘れよひと……

想いを封印して前に進もうとしている。

龍也だつて、俺だつて……

皆同じなんだ……

……………びつすればいいんだらうな

何をすれば丸く収まるんだろうな

運命からは逃れる事は出来ない

誰かがそつ言つてた気がするけど

……………全くその通りだ

唯……………

最近思つ事は……

俺にとっての幸せは

彼女の幸せだと言つ事。

だから

彼女が幸せなら……

俺はそれで良いと思った。

それが俺にとっての幸せなのだから。

……まあ、こんな取つて付けた様な綺麗事を並べたって

そんなのは唯の

偽満足のようなもんかもしんねえけど……

本気で俺はそう思つたんだ

番外編【夜寄 栄】（前書き）

番外編一です！

番外編【夜寄 栄】

栄 side

.....。

今日も収穫は無しか。

神奈.....あの娘からは何にも仕掛けて来ないし。

冷静じやない相手がなにより倒すの楽なんだけど。

それに

守護者の奴らも。

主があんなことされたのに殴り掛からないなんて

つまんないな。

まあ、龍也クンは授業中なんか.....凄いけど

例えば……

鋭い殺氣とか視線が背中に向けられてたり……

ああ、それで取り乱してくれれば弄り甲斐があるんだけど……

流石にあれくじらじや……

まだまだリミッターは壊れないみたいだね。

リミッターが壊れたら……

君たち守護者は

……どうなつてしまつんだろうね？

主人の目の前でどんな姿をするんだろうね?

壊れないなんて事無いんだからね

…………人間の限界、限度、強度、

それを越えたら君たち二人は…………

これは楽しみだ。

それに

人間関係の縛れ方もつとかも…… 実に見物だよ

友情が、仲間意識が

崩れ落ちる。

所謂、泥沼つて感じかな？

まあ、榎はどう思ってるか知らないけど。

榎は案外純粹だからね……

(コモリッター外れたら狼なんだけど(笑)…)

てか本当、福は何考えてんだか

俺にはねっぱりわからない。

まあ、俺の登場回数が一回しかまだ無いんだけど

やつぱりそこは俺らがどんな奴らだかわからんねーよな。

つて事で作者、丹波がそんな思いでこれ書いたんだよ。

つたく、意味わかんね。

まあ、作者としてなんとなーへ俺らについて書いてみたかったから、
つて言ひ理由じこねだ。

この女、何故に此処でその話を出すんだよ…

しかも番外編つて言ひとこ

超がつく程番外編だろ？が！！

つか、普通に始めの時にプロフィールとか書いとけよ。

俺はそう思う。

(そりや、忘れてたんだよ。しゃーねえじゃん！！
by。作者用選)

.....。

まあ、そりゃし！。

でめネタバレとかあるから

特定の所は飛ばすよ。

まず.....。

.....。

何、この紙？

Q1・浦島太郎の末裔なんですか？

紙は俺らへの質問りしげど

……何、ニーゆー形式？

……はあ、わかつた。

えーと、浦島太郎の末裔つてゆーのは嘘。

つか、普通にありねーでしょ

じや次。

Q2・彼女居ますか？

……。

居ないよ？

てか、殺されたい訳？

(.....すいません.....)

b y 作者用選()

Q3・身長体重は?

.....179?

533?

.....答えるの面倒なんだけど.....

次

Q4 誕生日は?

5月5日 イエモの日。

タマニング悪いでしょ?

いじもの田つて.....

(.....頑張れ)

Q5 神奈の事をじつに思つて語りますか?

これが最後みたいだね。

てか

何この質問

(……………私に聞かれたって知りませんよー。唯、知り合いの人気が気になってるからさー)

あー、はいはい。

わかりましたよ。

答えるべきなんでしょう？

そりゃ、皆さんのが思つ通り

大嫌いですよ？

あー皿ちゃん。

勘違いしないでくださいよ

どうせ大半の方は俺が神奈ちゃんの事を好きだとか思つてたと思こますが……

そんな訳、無いじゃないですか。

あつえませんよ。

神奈さんの事を好きなのは

龍也クンと凌駕クンと……

あの子ですからね

はい、あの子とは誰つて……

読んでいればいつかわかりますよ

あひとつね。

では、今日は此処まで。

またいつか

第九話【親友】

神奈 s·na e

「…………バスの中では静かにしましょーね～。

うつむくなかったら別に何しても良いから～」

あの日から数日。

あつといつ間に宿泊学習の日。

先生の合図でバスが動き出す。

ちなみに三泊四日。

宿泊学習のくせに舞アゲル……

つてか、あの担任……
何してもいいって……

あらゆる意味で凄いよね。

「…………んだよーッ、おまえな～」

「冗談だつて……」

「そんな怒るなよ凌駕（りょうがく）」

後ろの席では凌駕を始めとする男子生徒の騒（さわ）ぎ声。

。。

静かにしろって言われた傍（そば）から……

はあ
…………

幼稚園生（じようえんせい）じゃないんだから……

ほら、一応私（ひとうわたし）…………

生徒会（せいとくかい）長（なが）だし委員長（いんぜう）だし…………

言わば…………

全ての委員会（いんかい）のボス的存在（そだい）なんで…………

風紀（ふうき）とかの仕事（しごと）もやつてるから…………

いやあね、

小姑（こじゅう）とか姑（おひめ）みたいな感じ（じんじ）にぐじぐじ囁（囁）（囁）（囁）（囁）とかそんなのじゃないって
か言（い）うの自体（じたい）面倒（めんとう）なんだけど…………

癖ついちゃったんだよ……

自己意識過剰つて訳じやないけどわ

私、カンパニーの次期ボスだし

仕方ないんだよね

仕付けられたんだから……

はあ……

「…………神奈ツ、神奈ツ」

「……え？」

この子は隣の席の葉山美香。

長い栗色の髪をカールさせていてとっても可愛い笑顔がトレードマークの……

私の親友でもあり良き理解者。

クラスが違うから会える機会が少ないんだけど今回はバスの席が完全自由。

いわゆる、クラスなんて関係ないって感じ。

生徒会長の権力で仕組んだ事何だけどさ。

自由だから……

「ダークホース君が凄い神奈の事ガン見してるよー？」

美香が奴等の事を指差し溜息を吐く。

ダークホースってのは奴等の裏での通り名。

何故、美香がこの事を知ってるのかって言いつと……

実は……

こんな可愛い美香は……

裏の世界の情報屋だから。

この世界では珍しい……独立

フリーの情報屋。

この子との出会いは勿論、偶然だった。

出会いはこの学校に私たちがスパイとして入学した時。

プロの情報屋であつた美香は私たちを見るなり裏の人間である事を見破り……

なんか色々あつたけど

いつの間にか親友になつてた。

「…………うはあ…………」

面倒ねー…………ダークホース…………

「何気強いもんねー…………」

「強いってか…………」

犯されかけたし?

強いらしいけど…………

強さなんかよりもっと私にとつて重要なのは…………

セクハラかセクハラじゃないかって問題。

「…………だねー、歩く生殖器みたいな感じかなあ?」

「カラッ、美香。

女の子がそんな事言つちや駄目でしょ?」

「女の子なんかじゃないよ～

腐ってるし?」

汚れてるし?」

きつとダークホースよりも…………

……お願い美香……

そんな事言わないで…………

純粋な顔でそんな事言われたら反応に困るよッ！

「裏だし」

「…み、美香ッ！」

「そんな事、此処で言っちゃ…………」

「大丈夫、大丈夫」

情報漏れた場合プロの名に賭けて情報を知った奴等は消すからあ～

「

「…………」

私の回りの人は個性的だと今更ながら感じた宿泊学習一田田の朝

第十話【早過ぎじゃない?】

神奈 s.i.d.e

……………そして

「……みなさあん~、
宿泊先に到着しましたあ~
後は御自由にどおーぞ」

…………幼稚園じゃねえつつの

まあ、無事に宿泊先に到着

一言で言えば……

自然そのものを生かした感じの宿場。

緑が生い茂り地面に草のシルエットが描かれる。

本当、自然たっぷりって最高

大きな欠伸をしたら美味しい自然の空気が体内に流れ込む。

ああ

癒される……

ちなみに今、美香と一人で大きな木の上にて私は和み中

「…………ん~

そうか、 そうか……

奴は……………」

そして隣の美香は

手持ち型パソコンで

お仕事中……………

「………… よし、ハッキング成功 」

「………… どうやらお仕事は大成功のよう……………」

だけど

終わったかと思えば次は……

「…………」いつ何処に隠れたのかなあ……？」「

かくれんぼの鬼…………

いわく、搜索をし始める。

カチカチッ……

ブ……ブ……ブー……

ウ、一

ウイー……

様々な機械音が美香の回りを支配する

そして最後に

……ピコン、ピコン

「…………やつた」

びつから見つかったみたい。

「お仕事、終わった?」

「終わったよ

あとはアメリカ政府に脅迫状とスパイを送り込むだけ」

「……あ…………そう……」

その笑顔……

反応に本当、困る

やつぱり…………しばらく美香のパソコンの機械音がそいつと一緒に一体を支配してたのは言ひまでもない。

ま、しばらくつっても……

二、三分くらいの話しだけど……

たつた二、三分でアメリカ政府に脅迫状とスパイ挿入って……

15歳のやる事じゃないよね?

(…それはお前もだ b/s/作者)

「完了」と

パソコンの電源を切り欠伸。

「…………で、ダーク君、動きを見せましたよ

「え……」

早過ぎじゃない?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1045d/>

委員長とその守護者!?

2010年10月23日02時20分発行